

## 「思い出したように」について

氏家 啓吾 (東京大学大学院生)

萩澤 大輝 (神戸市外国語大学大学院生)

### 要旨

本論文では使用基盤モデルの立場から「思い出したように」という表現を分析する。この表現が言語知識を構成する「ユニット」となっていることを示し、実例の観察からその用法を明らかにする。「姑は時々思い出したように電話をしてくる」といった例は構成要素の意味から理解できる一方で、「思い出したように雨脚が強くなる」のように心を持った行為者が存在しない例や、「思い出したように電灯が立っている」のように物の空間的配置を表す例も観察される。このような意味が希薄化した用法では、〈思い出す〉という心的過程は意識されず、単に不定期的な反復を表している。この現象は分析可能性の低下および主体化の観点から分析が与えられる。言語知識の重要な部分を占める、ユニット化した複合的表現を綿密に観察し詳細に記述することは使用基盤モデルの理念に実質を与えることにつながる。

**キーワード**：「ように」、ユニット、分析可能性、主体化、使用基盤モデル

## *On omoidasita yooni*

UJIE Keigo (Graduate Student, The University of Tokyo)

HAGISAWA Daiki

(Graduate Student, Kobe City University of Foreign Studies)

### Abstract

This article analyzes the expression *omoidasita yooni*, literally translated as “as of recalling (something)”, from the perspective of the usage-based model advocated by Ronald W. Langacker. We argue that it constitutes a “unit” of linguistic knowledge, explicating its usage by observing attested examples. While some of its instances exhibit compositional semantics, others fail to do so (e.g. by lacking animate agents capable [126] of recall or by merely depicting a spatial configuration). Such bleached uses, in which the mental process of “recalling” is not manifest,

simply represents events that occur at irregular intervals. We analyze this phenomenon in terms of the decline in analyzability and the process of subjectification. Drawing on a close observation and detailed description of a unitized complex expression, the analysis presented in this articles provided empirical evidence for the validity of the usage-based model on which it rests.

**Keywords:** *yooni*, linguistic unit, analyzability, subjectification, usage-based model

## 1. はじめに

本論文では「思い出したように」という表現を扱う<sup>1</sup>。

- (1) a. 「—そういえば、数日前のことですが」鷹晃が、ふと思い出したように言った。  
(BCCWJ; 渡瀬草一郎『陰陽ノ京』)
- b. 姑は時々思い出したように電話をしてくる。その度に、子供はまだできないのかと聞くのだ。  
(山本文緒『ブルーもしくはブルー』)

これは一見したところ何の変哲もない表現に思えるかもしれないが、仔細に観察すると「思い出す」「ような」といった部分の意味だけでは理解できない興味深い特徴を持つことがわかる。例えば次の例では、自然現象の発生が描写されている。

- (2) そろそろ降り止みそうかなと思ったところで、また思い出したように雨脚が強くなる。  
(村上春樹『1Q84 BOOK1』)

さらに、次のように空間的配置の描写に用いられている例も見られる。

- (3) 左手に黒々とした倉庫らしい建物が続く。思い出したように立っている電灯が、それをいっそう寂しげに浮かび上がらせる。  
(BCCWJ; 渡辺淳一『流水への旅』)

複合的な表現は、繰り返し使用されると、ひとまとまりの要素として定着する。認知文法では、この定着した表現を「ユニット」と呼ぶ。本論文では、使用基盤モデルの立場から、「思い出したように」という表現がユニットとしての地位を確立していることを示し、「思い出す」や「ように」の知識から理解できる特徴 [127] とそれらだけでは理解できない特異な特徴の両方を持っていることを明らかにする。

構成は以下の通りである。第2節では使用基盤モデルの見方を紹介する。第3節では「思い出したように」における「ように」の働きを、先行研究を参考にして検討する。第4節では「思い出したように」全体がひとまとまりのユニットになっていると論じ、

---

<sup>1</sup> 以下、BCCWJとあるのは現代日本語書き言葉均衡コーパスからの例である。

この表現が「思い出すという心的過程を行為者に帰属する」という合成的な意味を介して、行動の唐突さや不定期的な反復を表すことを示す。第5節では、この表現が有生の行為者が存在しない事象に用いられる例を指摘し、意味の希薄化が生じていることを指摘する。第6節ではこの意味変化に Langacker のいう「主体化」が関与していると分析し、第7節では全体の議論をまとめる。

## 2. 使用基盤モデルとユニット

まず本論文で扱う現象に対して有効と思われる見方として、Langacker (2000, 2008) の認知文法で提唱されている使用基盤モデル (usage-based model) およびユニットという概念を紹介する。このモデルでは、言語使用を可能にする知識 (以下、言語知識) はすべて実際の言語使用から得られると考える。言語使用者は個々の実際の言語使用から、カテゴリー化の能力や共通性 (スキーマ) を抽出する能力といった心的能力を駆使して言語知識を立ち上げていく。そこで重要な役割を果たすのが定着 (entrenchment) というプロセスである。

例えば printer という語に初めて触れた時は構成要素の動詞 print と接辞-er の知識を手がかりとして理解するが、繰り返し触れることで次第に表現全体をひとつのまとまりとして操作可能になる。この過程が定着であり、定着した構造をユニットと呼ぶ<sup>2</sup>。言語知識は、こうして得られた抽象度・複合度の [128] 異なる多数のユニットからなるネットワークとして捉えられる。

ある表現がユニットとして定着しているかどうかを判断する手がかりとして、(i) コーパス上の生起頻度と (ii) 予測不可能性が挙げられる。まず、特定の組み合わせがコーパス上で出現頻度の多い場合、その表現はユニットとなっている可能性が高い。出現頻度が高いということは、当の表現に触れる機会が多いということであり、定着が生じてユニットになりやすいのである。

また、複合的な表現がその構成要素から予測できない特徴を示す場合もユニットとなっている可能性が高い。例えば、「油を売る」は「仕事をせず時間を浪費する」という意味を持つが、これは要素の意味から予測できない。この表現を円滑に理解・使用する

---

<sup>2</sup> Langacker (2000) は定着を次のように説明している。「心理的な事象は生起するたびにある種の痕跡を残し、その痕跡によって当の事象は再び生起することが容易となる。繰り返し生起することにより、きわめて複雑な事象であっても習熟の十分なルーチンとなり、容易に引き出され確実に実行されるものになる。複合的な構造がいわば「パック詰め」された構成体 (アセンブリ) として操作されるようになり、部分やその配置に意識を向ける必要がなくなったものを、ユニットの資格を持つと言おう」(Langacker 2000:3-4; 拙訳)

には「油を売る」全体が上記の意味でユニットとして知識の一部になっている必要がある。

ただし、頻度と予測不可能性はあくまで言語使用者の心内のユニットを間接的に知る基準である。比較的少数の事例に触れただけで定着が生じることもあり得るし、構成要素から予測可能な表現でも、定着している限りにおいて定義上ユニットとして認められる。

複数の要素からなる表現がユニットとなったからといって、ただちに内部構造が全く意識されなくなるわけではない。ひとつのまとまりとして操作可能になったとしても、ある程度は構成要素の貢献が意識される。複合的表現について、その構成要素による全体への貢献がどの程度意識されているかを分析可能性 (analyzability) という (Langacker 2008: 16–17)。

要素を組み合わせで作られた新規表現は分析可能性が高く、定着してユニットになると徐々に分析可能性が低下していく傾向がある。定着してはいるが構成要素が比較的はっきり意識されている「やくざ映画」などの表現は分析可能性が相対的に高い。一方、構成要素の働きがそれほど意識されない「あつというま」などの表現は相対的に分析可能性が低いと言える。さらに低くなると音韻や表記の変化を伴うこともある。英語の a lot of が a lotta と縮約される例などがこれに当たる。分析可能性がゼロになると、それはもはや **[129]** 複合的表現ではなく単一の形態素である。

以下では、このような見方を踏まえて「思い出したように」という表現を分析していく。

### 3. 「思い出したように」における「ように」の働き

まず「ように」の働きに目を向ける。「ように」の諸用法を詳しく分類・記述している前田 (2006) は、以下のような「ように」節を〈類似事態を示す用法〉とまとめた上で、従属節の表す内容が事実かどうか (「リアリティー」という点に着目して次の3つの用法に下位分類することを提案している (前田 2006: 12) <sup>3</sup>。

#### 【同等用法】(事実と一致している)

---

<sup>3</sup> 前田 (2006) は「ように」節に〈類似事態を示す用法〉〈結果・目的を示す用法〉〈思考・知覚内容を示す用法〉〈命令・祈願内容を示す用法〉の4つがあると述べる。〈類似事態を示す用法〉とされるものは、統語的には、修飾的・付加的に働く従属節を作る点、「に」を省略できない点が特徴とされる (前田 2006: 9)。例えば「よろめくようにそこに座った」の場合「ように」節が必須でなく、かつ「\*よろめくようそこに座った」とできない。なお、この分類については三宅 (2009) の批評も参照。

- (4) a. 人に生命があるように、植物にも生命がある。 (p. 12)  
b. 日本人には、日本人の味覚があるように、日本の猫にも、独自の味覚があります。 (p. 24)

**【比喩用法】(事実に反している)**

- (5) a. だが秀夫は、まるで足に根が生えたように動かない。 (p. 20)  
b. 岡崎奈美子は風船がしぼんでしゅーっと空気が抜けたように、いささかはやつれて痩せていった。 (p. 20)

**【様態用法】(事実かどうか未定)**

- (6) a. 「あたったわ」と那美子はびっくりしたように言った。 (p. 18)  
b. タクシーはゆっくり玄関の前を通り過ぎた。那美子はそのぞき込むように見た。 (p. 13)

同等用法では従属節の表す事態が一般的に受け入れられている事実であり、それと同様に主節の表す事態も事実だと主張するのに対して、比喩用法では従属節の内容は喩えとして持ち出された反事実的事態である。例えば (4a) の [130] 従属節「人に生命がある」の表す内容は一般に受け入れられていることだが、(5a) の「足に根が生えたように」は主節の内容を説明するための比喩であって、実際に「根が生えた」わけではない。比喩用法の特徴として、副詞「まるで」「あたかも」と共起できる、「～かのように」の形を取ることができる、といった点が挙げられている。

この比喩用法と似ているが区別されるものとして (6) のような様態用法が設けられている。(6a) では、「びっくりした」という描写は「仮説的」である。つまり、実際にびっくりしているかどうかは不明であり、事実に一致しているか反しているかは定まっていない。「那美子」が発言する様子を外面的に観察した結果、話し手は「びっくりしている」と仮説を立て、その仮説を引き合いに出して主節の行為の様態を表現しているのである。実際にそうであるか確かではないが、事実に反することに喩えているわけではない点が比喩用法とは異なる。

様態用法の中でも特に動詞のタ形と共起する場合は、「呆れたように」「察したように」など感情・思考を表す動詞との組み合わせが多いという (前田 2006: 16)。つまり、行為を描写する際に行为主体の心的過程についての仮説を引き合いに出してその様態を述べるということである。

様態用法についての以上の分析は、「思い出したように」にそのまま適用することができる。

(7) 「—そういえば、数日前のことですが」鷹晃が、ふと思い出したように言った。

= (1a)

「鷹晃」の発言する様子から、話し手は彼が思い出したのだと仮説を立て、その仮説を引き合いに出してその行為の様態を表現していると言えるだろう。つまり、この「ように」節は様態用法、特に心的過程についての仮説を用いて行為の様態を描写する用法の事例であると言える。

#### 4. ユニットとしての「思い出したように」

##### 4.1 ユニット性の証拠

「思い出したように」は様態用法の「ように」と動詞「思い出す」のタ形との組み合わせである。しかし、日本語の母語話者がこの表現を使ったり理解 [131] したりする時には、各要素をその場その場で組み合わせるのではなく、ひとまとまりの表現として扱っていると思われる。つまり、2節で述べたように話者の心内に定着しユニットとなっているのである。そのことを支持する証拠として、以下の2点が挙げられる。

第一に、コーパス上の共起強度からこの組み合わせが定着していることが推察される。現代日本語書き言葉均衡コーパスのデータをもとにコロケーションを調べることができる検索システム「NINJAL-LWPforBCCWJ」を用いて調査を行った。この検索システムでは共起数だけでなくコロケーションの強度を示す MI スコア（相互情報量）を調べることができる。MI スコアは、ある語と別の語の結びつきの強さをそれぞれの語の生起回数とコーパスの総語数を考慮して数値化したものである。共起回数が同じ場合、共起語の単独の生起回数が多いほど MI スコアの数値は低くなる<sup>4</sup>。見出し語「よう」について、「動詞過去+よう」のパターンに生起する動詞を調べた。単純な共起数で見ると「思い出す」は 224 回で 14 番目だったが、MI スコアで見ると、「思い出す」の値は 15.28 と、「する」(21.66) に次いで 2 番目に高かった。「思い出した」と「ようだ」の結びつきは非常に強いと言える。また、その際の「ようだ」の活用形はほとんどが「ように」(224 例中 223 例)であったことから、「思い出したように」がひとまとまりのユニットとなっている可能性が高いと言える。

第二に、第 5 節以降で詳しく述べるように、意味が希薄化し、意志的行為者が存在しない場合にも用いられる用法を獲得している。このような用法は構成要素から予測できないものであり、この表現がユニットとして確立していることを示していると考えられ

---

<sup>4</sup> MI スコアは  $\log_2(\text{連鎖 AB の数} \times \text{コーパスの総語数}) / (\text{A の数} \times \text{B の数})$  で算出される。

る。

#### 4.2 思い出すことと〈唐突さ〉

ユニットとしての「思い出したように」は、以下の例のように、唐突な行動を描写する際に使われることが多い<sup>5</sup>。[132]

(8) 「—そういえば、数日前のことですが」鷹晃が、ふと思い出したように言った。

= (1a)

(9) 浜五郎は思い出したように懐から包みを出した。(BCCWJ; 河治和香『秋の金魚』)

(10) 伊織は運ばれてきたジュースを一口飲んでから、思い出したようにきいた。

(BCCWJ; 渡辺淳一『ひとひらの雪』)

これらの例では、主節の表す行動が予測できないタイミングでなされたこと、つまり唐突な行動であることを示す働きをしている。

「思い出したように」が主節の行為の〈唐突さ〉を表すことは、第2節で述べた「ように」節の働きと動詞「思い出す」の意味を考慮すれば理解することができる。〈思い出す〉という概念の背景には、次のような過程がある。

- ①知識・経験・予定などが意識されている状態
- ②それが忘れられ意識されなくなっている状態
- ③それが再び意識に上っている状態

動詞「思い出す」はこれらの局面を喚起しつつ、②から③への変化を指す。こうした心的状態の変化は基本的に意志とは無関係に生じるものであるため、何かを思い出すタイミングは予測できない。それゆえ「あ、そういえば」と思い出して取った行動は唐突な行動になりやすい。したがって逆に、他者の唐突な行動を観察した時には、思い出して取った行動なのだと仮説的に考え、その心的過程についての仮説を引き合いに出して

---

<sup>5</sup> 「思い出したように」の用例が観察されるテキストは文学作品に顕著に偏っている。ただし、新聞記事やブログ等を観察する限り、文学作品に限られた表現とまでは言えない。例 [132] えば以下は新聞記事からの用例である。

(i) トランプ氏は議会採決に向けて大詰めを迎えた税制改革に関する演説で、「[...] 中小企業が大減税を支持している。なぜなら米国が経済成長するロケット燃料になる」と発言した際、思い出したように「小さなロケットマン。彼 [引用者注：金正恩のこと] は病んだ子犬だ」とだけ付け加えた。  
(朝日新聞デジタル 2017年11月30日)

その行動の様態を表現することができる<sup>6</sup>。

一回的な行動だけでなく、反復される行動についても、それが不定期的に予 [133] 測できないタイミングでなされる場合には唐突なものとなされ、「思い出したように」が用いられることがある。実例を見ると、このような不定期的に反復される行動を描写する用法が多く観察される。

(11) 姑は時々思い出したように電話をしてくる。その度に、子供はまだできないのかと聞くのだ。 = (1b)

(12) もともと希典はとくべつの用件でもないかぎり手紙をよこさぬ人であったから、静子もそのことには慣れていた。それでも、ときに思い出したように葉書が来る。

(BCCWJ; 渡辺淳一『静寂の声』)

これは以下のような仕組みによるものと考えられる。忘れるたびに思い出して行動すると、結果として間をおいた不定期的な反復になるため、逆に他者のそのような反復的行動を観察した時に、何度も思い出しているのだろうという仮説によってその様子を描写することができる。

なお、上の例から明らかなように、反復される行動を描写する用法では「時々」などの頻度表現と共に強い傾向が見られる。こうした共起関係自体も「思い出したように」という表現に関する知識の一部として定着していると考えられる<sup>7</sup>。

まとめると、「思い出したように」には2つの側面があると言える。

- (13) i. 行為者に〈思い出す〉という心的過程を仮説的に帰属する
- ii. 一回、あるいは複数回の〈唐突な行動〉を描写する

(i) の側面は構成要素の意味の組み合わせとして捉えられるものであり、(ii) の側面はそこからの帰結である。

## 5. 意味の希薄化

---

<sup>6</sup> 〈思い出す〉という心的過程の帰属と〈唐突さ〉は必然的に結びつくわけではない。例えば、「先ほどの光景を思い出したように、男は顔をしかめた」(作例)といった場合は唐突さを表現しているわけではない。この例では、顔をしかめる原因が発話時点では見当たらないため、過去の想起を仮説的に持ち出しているのである。

<sup>7</sup> なお、一回の唐突な行動を描写する用法では「言う」、「尋ねる」などの発話に関わる動詞が、反復される行動を描写する用法では連絡や訪問を表す動詞が多く用いられる傾向が顕著に見られた。



### 5.1 意志的な行為者が存在しない用法

動詞「思い出す」は心的過程に関わる動詞である。心を持たないものは思い出すことはできない。しかし「思い出したように」の用例のうちには、以 [134] 下のように心を持つ行為者が存在しない事態を表す例が見られる。これは「思い出したように」の意味が希薄化していることを示唆する。

(14) そろそろ降り止みそうかなと思ったところで、また思い出したように雨脚が強くなる。  
(村上春樹『1Q84 BOOK1』)

(15) 時々思い出したように、しずかな波がやって来て、砂を洗う。(梅崎春生『幻化』)

描写されている対象はそれぞれ雨と波といった自然現象であり、思い出すことの主体たりえない。

これを「足に根が生えたように」と同じく「ように」の比喩用法が用いられた擬人化の例と見ることも可能かもしれない。しかし、「まるで～かのように」を用いて比喩であることを明示すると、純粋な比喩用法とは違って、これらの例では容認性が下がる。

(16) a. まるで足に根が生えたかのように動かない。

b. ??まるで思い出したかのように {雨脚が強くなる／波がやって来て砂を洗う}。

したがって、比喩用法ではなく、第3節で分析したユニットとしての「思い出したように」に意味の希薄化が生じたものだと考えられる<sup>8</sup>。こうした用法では、心的過程についての仮説によって様態を描写するという側面が薄れ、単に事態の唐突さを表す表現として用いられているのである<sup>9</sup>。

自然現象の他にも、次のように感覚を描写する例が見られる。[135]

(17) その頃数回病院に通って腰の痛みはなくなったのですがたまーに思い出したよう

<sup>8</sup> 心を持つ行為者の存在しない例に比喩がまったくないわけではない。例えば次例は、劇的な場面際に、物理法則までもがその働きを一瞬忘れているという修辭的描写である。

(i) おそらく首が落ちてから二息するほど後のことであろうか。思い出したように、御子丸の首の切断面から血が噴き上がった。  
(BCCWJ; 朝松健『真田三妖伝』)

<sup>9</sup> 塩濱 (2015) は村上春樹の小説『1Q84』で使われている「思い出したように」が英語版 (Jay Rubin 訳) でどのように訳されているかをブログ記事で報告している。「人以外に関する例」とされる6つの例を見ると、almost as an afterthought とやや比喩的な表現が1例あるものの、それ以外の5例はどれも比喩的な表現を使わずに訳されている。例えば、「時折雀たちが思い出したようににさえずるだけだ」は、“There was just the occasional burst of chirping sparrows”と頻度表現で訳されている。このことも、人以外に「思い出したように」が使われる場合にそれほど比喩として意識されていないことを示唆する。

に今でも痛くなることがあります。(BCCWJ; Yahoo! 知恵袋)

(18) 思い出したようにこめかみがうずき始めた。(宮部みゆき『クロスファイア』)

希薄化が生じていることは以上のような行為者が存在しない例からはっきりと分かるが、人間の行為者が関与している場合でも、心的過程の仮說的帰属という側面が薄れている例が見られる。

(19) 何ヶ月かに一回、思い出したように開かれる裁判は、回を重ねるごとに惰性に流れ、さながら商店会の無尽講の如きタダの寄合になった。

(BCCWJ; 浅田次郎『キンピカ』)

この例では、行為者は存在しているものの、裁判官に〈思い出す〉という心的過程を帰属しているとは考えにくい。むしろ、反復される出来事の間隔が長く、タイミングに規則性や合理性がないことに重点がある。

次の例も、行為者は存在するが、その心的過程は問題になっていない。

(20) ふたりは肩をならべて、すわりこんだ。思い出したように、車がとおり過ぎる。一度、あられもない言葉を浴びせかけていく車があった。

(エラリー・クイーン (著)・宇野利泰 (訳)『ドラゴンの歯』)

車にはそれを運転する人がいる。しかし、ここで描写されているのはそれぞれ一度だけ通過する別個の車であるため、特定の運転者に〈思い出す〉という過程を帰属しているとは考えられない。そうではなく、通過の間隔が長く不規則的であることを表している。

このように、行為者が存在する用法としない用法の間には、要素の意味の貢献が徐々に薄れていき、(一回的であれ反復的であれ<sup>10</sup>) 事態の唐突さが際 **[136]** 立つようになる連続体がある。以上は、第2節で触れた分析可能性の低下として捉えることができる。ユニットになると分析可能性が低下し、(13) に挙げた2つの側面のうち (i) が意識されなくなっていく。すると (ii) の側面だけが残り、心を持つ行為者が存在しない希薄化した用法も可能になる

---

<sup>10</sup> 希薄化した用法の例のうち、多くは反復的な事態を描写するものであるが、一回的な事態を描写する例も存在する。脚注8に挙げた比喩的な例と痛みの発生を表す例(18)がそれに該当する。また、次の例も一回的な事態を描写しているものと解釈される(査読者の一人から提供していただいた作例を一部改変した)。

(i) ニヶ月前からあった頑固なできもの。もう諦めかけていたが、今朝、思い出したように潰れた。

<sup>11</sup>。とりわけ、反復される出来事の描写に用いられる場合には、それが長い間隔を置いて不定期的に繰り返されることに重点が移る。その結果、頻度表現に近い用法を持つに至っている。

## 5.2 空間的配置を表す用法

次のように、「思い出したように」が物の空間的配置を表している例も観察される。

- (21) 左手に黒々とした倉庫らしい建物が続く。思い出したように立っている電灯が、それをいっそう寂しげに浮かび上がらせる。 = (3)
- (22) ことごと走る電車の窓の向こうは、かつて色だけ見ればイギリスのゴルフコースのように一面のみどりであったが、現在は田んぼのなかに、よきよきと思い出したように新しいものが建っている。 (姫野カオルコ『ツ、イ、ラ、ク』)

この用法は、時間表現が知覚者の移動を介して空間的配置を描写するのに用いられる現象の一例として分析することができる。本多 (2005:26) は、Talmy (1988) による次の例を用いてこの種の現象を説明している。

- (23) There is a house every now and then through the valley.

ここでは頻度表現を用いて、家がところどころに点在している様子が描写されている。これは知覚者の移動を考慮することで説明できる。本多によれば、家が点在している様子を描写するのに *every now and then* (ときどき) という頻度表現が用いられるのは、「ところどころ」に点在する家は動いている知覚者にとっては「ときどき」出会うものとなるからである。また、通常移動動 [137] 詞とともに用いられる *through* がこの文では *there is* という静止した物の存在を表す構文で用いられている点も、知覚者の運動を想定すれば理解することができる (本多 2005:26–27)。このように、頻度表現が物の空間的配置を描写するのに用いられる現象は、知覚者が移動に伴って次々に物に出会う経験を想定することで説明できるのである。

「思い出したように」が不定期的な反復を表していると考えれば、上記の (21) (22) も、知覚者が移動に伴って客体と出会うことを想定することで説明できる。知覚者が道を通行する時には、道に点在している電灯に不定期的に出会うことになるだろう。これ

---

<sup>11</sup> 意味の希薄化や主体化といった現象は、文法化に伴うプロセスとしてしばしば論じられる。複合的表現のユニット化に伴う分析可能性の低下という本稿の考え方は、語彙と文法の二分法にとらわれず変化の背後にある原理を捉えることを可能にする。

は、次の対比を考えるとわかりやすい。

- (24) a. 思い出したように車が通りすぎる。
- b. 思い出したように電灯が立っている。

(24a)では、複数の物が移動して知覚者のいるところを不定期的に通り過ぎることで、知覚者は「ときどき」物に出会うことになる(図1a)。空間的配置を表す(24b)では、物が点在しているところを知覚者が移動する。この場合も同じように、知覚者は「ときどき」物に出会うことになる(図1b)。

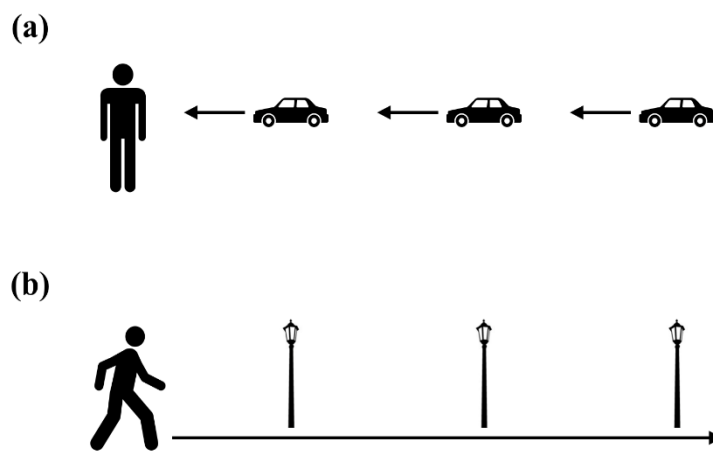


図1 知覚対象の移動(a)と知覚者の移動(b)

これら2つの状況は、主体が移動しているのか客体が移動しているのかが異なるだけで「ときどき出会う」という点では同様であるために、同じ表現が使われうるのである。この現象も「思い出したように」の意味が希薄化し、頻度表現に近づいていることを示している。[138]

## 6. 主体化

ここまで、「思い出したように」に意味の希薄化が生じていることを論じてきた。例文を再掲する。

(25) 姑は時々思い出したように電話をしてくる。その度に、子供はまだできないのかと聞くのだ。 = (1b)

(26) 左手に黒々とした倉庫らしい建物が続く。思い出したように立っている電灯が、それをいっそう寂しげに浮かび上がらせる。 = (3)

(25) の例では〈思い出す〉という心的過程が仮說的に行為者へ帰属されていると言えるが、意味の希薄化を経た (26) の例ではそのような側面は消失し、〈不定期的な反復〉という側面が前景化している。

しかしながら、こうした例で〈思い出す〉という過程はいかなる貢献もしていないのだろうか。希薄化した用法においては、〈思い出す〉過程が別の形で表現の意味に関わっている可能性がある。(25) の例では思い出しているのは行為者(「姑」)である。それに対して、(26) の例において思い出しているのは事態の参与者ではなく事態を概念化する主体(観察者)であると考えられる。つまり、もともとの用法では行為者に帰属されていた〈思い出す〉という心的過程が、希薄化した用法では観察者の心的過程へと移行しているのである。

例えば、道の電灯に一貫して注意を払っている場合よりも、「あ、電灯だ」「あ、また電灯だ」というように、忘れては出会う度に思い出す場合の方が「思い出したように」を用いた描写が自然であると感じられるのは、このことによると思われる。言い換えれば、観察者が「忘れたところに」出来事が生じる場合に使われやすいということである<sup>12</sup>。

これは Langacker のいう「主体化」(subjectification) の一例と見ることができる。主体化は「ある関係が客体の軸から主体の軸に配置換えされること」と定義される (Langacker 1990: 17)。つまり、言語表現の意味に含まれる関係成分が、概念化の客体から概念化の主体や概念化過程そのものへと重点を [139] 移すことである<sup>13</sup>。

意味変化のもととなった (25) の用法では、〈思い出す〉という関係成分は客体の軸にある。つまり、概念化の客体である行為者の心的過程に関与するものである。一方(26) の用法では「配置換え」が起こり、その成分が主体の軸にある。つまり概念化の主体である観察者の心的過程に関与するものとなっているのである。

## 7. 結語

以上、本論文では、認知文法の立場から「思い出したように」という表現を分析した。本表現は言語知識を構成するユニットであり、その諸用法は分析可能性の低下による意味の希薄化と主体化の過程によるものと主張した。

---

<sup>12</sup> 「忘れたところに」という表現もユニットとなっていると思われる。この表現は観察者による忘却を概念化の対象としていると言える。

<sup>13</sup> 主体化の事例として分析されるものには英語の *be going to* や法助動詞の意味変化などがある。英語の法助動詞がもととなる本動詞から発達してきた過程の一部は、事態を生じさせる力のありかが、文の主語である行為者から話し手による概念化の場そのものへと移行したことによるものとされる (Langacker 1990)。Langacker の主体化概念の変遷と分類に関する詳しい議論は本多 (2016) を参照。

使用基盤モデルの考えが正しければ、本稿で扱ったような具体的な表現の振舞いの微細な特異性は言語の至るところに見られるはずであり、「思い出したように」はそのほんの一例にすぎない。このような現象を具さに観察・記述することは使用基盤モデルの理念に実質を与えることにつながる。

## 参考文献

- 塩濱久雄 (2015) 「「思い出したように」は英語で？」 <https://blog.goo.ne.jp/h-shiohama/e/24edb4a508c488da346e6d6a2137f67a> (2020年3月最終閲覧)
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』 東京大学出版会.
- 本多啓 (2016) 「Subjectification を三項関係から見直す」 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 pp.91–120, 開拓社.
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』 笠間書院.
- 三宅知宏 (2009) 「書評 前田直子著『「ように」の意味・用法』」 『日本語の研究』 5, pp.74–79.
- Langacker, Ronald W. (1990) Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1 (1), pp. 5–38.
- Langacker Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. Michael Barlow and [140] Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based models of language*, pp.1–63. Stanford: CSLI Publications. (坪井栄治郎 (訳) 「動的使用依拠モデル」 坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 pp.61–143, ひつじ書房.)
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. New York: Oxford University Press.
- Talmy, Leonard (1988) The relation of grammar to cognition. Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in cognitive linguistics*, pp. 165–205. Amsterdam: John Benjamins.

## 言語資料

現代日本語書き言葉均衡コーパス

Ninjal LWP for BCCWJ (<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)

## 付記

本稿は日本語文法学会第20回大会 (2019年12月7日, 学習院大学) で行った口頭発表「ユニット化の諸相—「思い出したように」についての一考察—」の内容を発展させたものである。発表の際やその他の機会に助言をくださった方々, 特に構想の段階から

## 「思い出したように」について

親身に相談に乗ってくださった田中太一氏(東京大学大学院)には深く感謝申し上げます。  
また、『日本語文法』の3人の査読者からいただいた有益なコメントによって本稿の内容はいくつもの点で大きく改善された。

(最終原稿受理日 2020年7月19日)